

【論文 (Peer Reviewed)】

## パークレーに行き、アジアから受け入れる

### 奥平真砂子へのインタビューから

立命館大学大学院先端総合学術研究科

権藤 真由美

要旨：

障害のある人が、研修と称して政治や経済、文化の違いがある外国へ行くことで何かを学び得ることは可能なのだろうか。本稿では、障害の差異や共通性のもと何が起こり、人は何を何を得て何を与えることができるのかという問いをたて、ひとりの研修経験者を取り上げた。その結果、研修前から自立生活運動への関りはないまま研修地へ赴いたが、具体的な制度や仕組みを学び自らの将来像を見出し肯定的な影響を受けたことが分かった。したがって、障害という紐帯は制度などのもたらす差よりも強いとも思われた。しかしながら、研修前後の自立生活運動の関りの有無によって何か異なるのか、研修先で得られたものは、日本の運動・政策にどのように影響したのか、また、肯定的なものだけなのか。海外という場所や人との出会いによって得るものがあるのであれば、複数の人に調査をおこない確かめるといった課題も明らかとなった。

キーワード：

障害、差異、パークレー、自立生活運動、研修

#### 1. はじめに

##### 1-1 本稿で設定する問い

障害がある人が研修と称するもので外国に行き、帰国後に今度は外国から障害のある人を研修として受け入れる側になる。この「研修」によって人は何を何を得るのだろうか。両国の間に政治や経済、文化の違いがある時、両者は何かを学ぶことが可能なのだろうか。それは、海外援助、人道支援といった行ないについて長く問われてきた問題でもある(松本・佐藤[2021])(佐藤[2021])。

一方で、障害という共通性が、そうした差異を超える強固なものであるという主張がある。例えば伊東香純は精神障害者の国際的な運動に対する調査・研究の中で「自らの考えや体験を否定された経験は、精神障害を理由とした医療による非自発的な介入や代理意思決定制度などによって差別されてきた精神障害者による運動だからこそ見出された連帯の基盤といえる」(伊東[2021]:338)と結論づけている。しかし、それは他の障害を含む障害全般についても言える

のだろうか。そして、こうした差異や共通性のもとで何が起り、人は何を得て何を与えることができるのだろうか。

## 1-2 取り上げる人たちについて

本稿では「研修」によって得られるもの、特に障害という切り口からみた「研修」の意義について明らかにする研究の始まりとして、一人の人を取り上げる。奥平真砂子は、1981年に開始された「ミスタードーナツ障害者米国留学派遣事業」(後に「ダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業」)の第1期の研修生であり、その後、日本から外国への研修生を送り出す仕事に、さらに、外国からの研修生を受け入れる仕事に長く従事してきた。

まず、奥平のインタビュー(奥平[i2018a][i2018b])から、その経験と経験を経た思いを描いていく。その際、奥平の経験に関与する人たちについても見ていく。奥平と同じ出身地で障害者運動を牽引していた平井誠一★01、奥平が大学生であった時期に関西で障害者運動をけん引していた尾上浩二★02、奥平が「研修」生として訪問したバークレーで出会った安積遊歩、桑名敦子、樋口恵子が登場する。安積遊歩と樋口恵子は、帰国後日本の障害者運動で中心的な役割を果たし、桑名敦子はバークレーで出会ったアメリカの活動家マイケル・ウィンターと結婚し、彼の没後もアメリカで生活を続けている。こうした人々の経験を付加して全体を俯瞰することは、「研修」が日本の障害者運動に与えた影響を理解するうえで重要なことであるが、本稿は論点を絞るため、奥平の経験に焦点化するが、書ききれない部分については別稿で論ずる。

## 1-3 調査の概要

奥平へのインタビューは2018年6月30日に奥平の当時の職場であった戸山サンライズにて実施した。聞き手は立岩真也と筆者であり「ミスタードーナツ障害者米国留学派遣事業」(後に「ダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業」および「ダスキンアジア太平洋障害者リーダー育成事業」)に関する情報提供を依頼した。

奥平に承諾を得て音声を録音しインタビュー終了後、逐語録を作成、分析をおこなった。またその他のインタビューについても話し手の理解を得たうえで、話し手の著作物として公開されているものを、そのインタビューに関する情報を記載した上で引用している。

## 2. 1957～富山

### 2-1 奥平の経験

奥平は1957年5月1日、富山県富山市に生まれた。未熟児として生まれ、重度の黄疸に罹り、脳性まひ(CP)となった。4歳の時、富山市にある肢体不自由児を対象とする高志学園に入所し、そこで生活しながら併設され隣接する高志養護学校小学部・中学部・高等部に就学した。

奥平 私、4歳から高志学園って施設〔現在は統合・再編された「富山県リハビリテーション病院・こども支援センター」、富山市〕に入って、18までそこにいたの。富山。施設に養護学校〔富山県立高志養護学校、現在は高志支援学校〕が併設された、今でいう特別支援学校、小学校から中学部、高等部って行った。

―― 施設と学校は屋根のある渡り廊下隔ててみたいな感じ？

奥平 そう、つながってたよ。

―― たしか平井〔誠一〕さんが53年生まれ。

奥平 「先輩の真似をしちゃいけないわよ」って(笑)、すごい言われて。

―― その悪い先輩が平井さんだった。

奥平 平井さんだったの(笑)。私なんて、ほんとに、「障害者運動なんてだめだ」って教わってきた人だから。

―― その平井さんたちと仲間になっちゃいけない、みたいなことを言われて育ったみたいな話を何年か前に奥平さんから聞いてさ。この間、平井さんにインタビューしたんだ(平井 [i2018])。そんなふうには話聞いていって、人はつながるんだって思いましたよ。平井さんは青い芝〔の会〕、全障連〔全国障害者解放連動連絡会議〕でしょう。

奥平 そう。

―― そういう人はけっこういるんだよね。他の地域でも、青い芝、若干いて、「あいつら過激派だから近づくな」的なこと言われて。

奥平 そうそうそう(笑)。

## 2-2 平井誠一の経験

平井誠一は奥平よりも4年ほど早く1953年5月10日に同じ富山県で生まれた。奥平と同じ脳性麻痺の障害である。奥平同様に幼少期に入所施設に入り、そのまま学校生活を送っている。2人は何年か同じ施設にいた。

平井 僕は3歳の頃、学校と病院が併設の施設に入ったんです。高志学園というところがあったんです。そこで、小学校6年まで同じ施設で育ってきたんです。中学校になってから養護学校ができてきて、そっちに移ったんです。

養護学校にいた時に、たぶん僕が運動に関わるきっかけというのはここかなと思ってるんですけど。僕が13の時に中学校1年です。その時に母親が腫瘍で亡くなったんですよ。母親が亡くなった時に、僕は泣かんかったんです。泣けんかったんです。泣けんことをけっこう、親父なり、養護学校の先生に責められて。

母親が亡くなって、僕が責められるようになって、なんで責められんといけないのかというのが、僕の中ですごいモヤモヤしながら、中学校、高校時代を過ごした。(平井 [i2018])

親の死を悲しめなかった(のを咎められた)ために社会運動の方に行ったのだ、という話は他

で聞いたことはない。その平井がその後何をしたのかはインタビューで語られている。そのなかで、「悪者にされた」と自ら語ったのが以下である。

平井 八木〔勝自〕君〔1954年生、CP〕★03を病院から出してきたのは僕なんです。古込〔和宏〕さん〔1972生 2019没、筋ジストロフィー、cf.立岩〔2018〕〕がおった医王病院〔石川県金沢市〕と同じ系列の。

―― 国立療養所ってこと？

平井 国立療養所富山病院〔現在は、国立病院機構富山病院〕。そこから、77年頃に勝自を出した。当時はもうめっちゃくちゃ悪者にされて。

―― 八木勝自ですよ？ 八木さんって脳性まひですよ。そこに八木さんが入院されとったんですか。

平井 はい。家族が面倒見れないということで。その前は、高志学園にいたんですが、結局、高志学園の対象じゃないと言われて、重いから★04。

―― 高志学園の入所の方より富山病院の入居の方が軽い？ 八木さんはたしかにまあ重いは重いか。国療って筋ジスってイメージありますけど、重い人はけっこういろいろ、入れられたということはあったみたいですね。77年だと全障連〔全国障害者解放運動連絡会議〕が出来た次の年ぐらいからですか。(平井〔i2018〕)

77年頃のことだとすると、奥平は76年に大学に進学しており富山にはいない。その後、平井は、全障連の活動でいろいろと各地を行ったり来たりはしつつ、ずっと富山に暮らし、活動する。

関わってはいけないということで、同じ場や近い地域にいながら具体的な接点はなく、しかし平井のことは知らなくはなかったといった具合に、そのまま二人はすれ違っていた。

こうして奥平の周囲に何も無いわけではなかったが、隔てられ、実際の関わりはなかった。その後、奥平は、富山の養護学校で大学に進学する最初の人として、富山から離れた。

### 3. 1976年～ 京都

#### 3-1 大谷大学

卒業後、1976年、京都市にある大谷大学に入学し、1980年に卒業後、同年4月、京都高島屋内に販売コーナーのあったガット・リハビリに就職した。

―― 18歳で大谷大学だよ。それは普通に受験生やって、大学受験して？

奥平 そうだよ。だからさ、これ自分の歴史になっちゃうんですけど(笑)。先輩が何人か大学に挑戦してただけど誰も合格してなくて、私が行きたいって養護学校の先生に言ったら、先生、すごい反対して。

―― それはなに、受かんないからみたいな話？

- 奥平 ていうより、「障害者が大学に行って何をやる」みたいに言われて、
- 「何になる」、みたいな話？ 「行ったってしょうがないじゃねえか」、って。
- 奥平 そうそう。「おまえたちは手に職をつけろ」、みたいな。
- 「そっちが先だ」、みたいな。
- 奥平 そうそう。
- 富山のそこでは、それまで大学に行った人なんかあんまりいなかった？
- 奥平 いなかった、いなかった。私が…、
- あんまりどころじゃなくて最初ぐらい？
- 奥平 私がファーストワンだった。そう。だから校長室に呼び出されて、校長にそんなこと言われ。
- 校長に「やめとけ」って言われたわけ？ (笑)
- 奥平 「やめてくれ」じゃなくて「やめろ」って言われた (笑)。
- 「やめろ」って言われた。それはずいぶんだね。
- 奥平 まあそういう時代だったんだよね。だから、とにかく障害者は手に技術をつけて何とか生計を立てるっていうのが順当な道だったんじゃない？
- 平井さんは印刷屋さんに勤めてたって言ってたけど。
- 奥平 そうそうそう、だから男の人は印刷か木工。で、女の人は洋裁か和裁。印刷に行った人もいたかもしれないけどそんな感じ。
- 鈴木絹江さん〔1951生 2021没〕なんかもさ、郡山で、洋裁やれとかって言われてやってたって言ってたよね★05。
- 奥平 おんなじ、おんなじ。
- その当時って障害者で手足が若干動く人の職業ってのはそういうもんだみたいな、そういう時代だったのかな。
- 奥平 そうそう。座ってできるし、そう。でさあ、私、手悪いしそんなの商売になんないだろ、とか思ったわけね。たまたま親が教育者だったっていうのもあるのかもしれないけど。「大学に行きたい」ついたら、「教育にはお金出してやる」って言ったのね。そんで行くことにしたんだけどさ (笑)、校長に反対されて。で、養護学校の勉強ってレベル低いでしょ。本当に低かったと思う。で、どうしようって思ったら、受験科目をなるべく少なくして、何か…、それでまずは富山県の短大とか大学とか調べたけどどこも受け入れてくれなくて、入試も受けさせてくれなかった。だから今だと差別よね。
- でもその頃は、「そんな、障害者ってやっぱりだめなんだ」と思って。
- それってでも、分かるような分からないような話。受験って願書出しゃいいわけじゃん。
- 奥平 いや、でも養護学校の生徒だったし、受けさせて下さいって。そう、今だったらそうかもしれないけど、その時は…、
- 言いに行くのか。それは養護学校が？

奥平 いやいや。多分、私、自分で調べたと思うのよ。「受けられますか？」みたいな。

―― で、

奥平 だめって言われ(笑)。

―― 県内はだめだって言われた。

奥平 それで、受け入れてくれそうで、かつ、まずは自分の受けられそうな科目を受験科目にしてる大学を探して、そこでいくつか調べて、京都と奈良と大阪。何か関西に…

―― 富山からだど、近いは近いね。

奥平 で、調べて3つ受けたよ。奈良、帝塚山女子短大。大谷短大。ともう一つ、大阪の何か、何だっけ、名前さえ忘れちゃった。ここは結局受けなかったと思う。親が「ここはやめなさい」って言った。で、帝塚山女子と大谷短大、受かったけど、最初帝塚山女子短大に受かって、親が入学金とか見て、「あんたどうする？ ここだけだったら、うちお金出せない」って言われて(笑)。高くて。それで、「えー、どうしよう」と思ったら、大谷が受かってそこに行ったの(笑)。

―― 大谷のほうが安かったってこと？

奥平 安かった。

―― あそこは浄土真宗の大谷派ですよ。そういうこともあるのかな。

奥平 よく分からないけど(笑)。

―― 場所はあそこでいいの？〔京都市営地下鉄〕北大路の駅の真ん前。

奥平 そうそう。でさあ、私、ほんとに今考えるとよく合格したなって思って。それで、受験科目の先生が特別に勉強見てくれたの。国語と古文と社会と英語。

―― 私学の文系だから社会と国語と英語、3つで受けられるわけですよ。

奥平 うん、そうそう。それで、だから、3人の先生が放課後とか土曜日の午後とか勉強を見てくれて。それで…、

―― それで2つ受かって、帝塚山はお金かかるからやめて、大谷は安かったから入って。何年前だろう、北山通りの店で奥平さんに話聞いたじゃない？ その時間いた話で覚えているのは、大学でけっこう、ぼつんとしたって話。

奥平 うん。

―― 短大だから2年？

奥平 2年で、その後編入したの。編入試験受けて。

―― 4年制の方に。それで大谷を4年で出た。

奥平 こないだ短大と四大の卒業証書を見つけたのね。そしたらそこに成績入ってて、「あつ、やばい！」って思ったことがあって(笑)。何かほら大学、今はよく分かんないけど、その頃大学の成績ってSとかさ、AとかB、C、Dでしょ。でさあ、Kっていうのがあって、なんだかわからない。当時の先生に聞かないと分からないけど、「危険」じゃないかって。きっとさあ、障害者かわいそうだからって卒業させてくれたのかなって勝手に思った(笑)。もちろん全体がKじゃなくて、いくつかの科目がKで、見たら英語だけはSだったよ。

—— そっか、英語はできたんだ、前から。

奥平 いや、よく分かんないけど、劣等感が激しくてなんか他の人と一緒にいるっていうのができなくて。だからサークルも入ってなかったのね。それで暇でしょ、だいたい、単位とか取ってくと。京都の駅前で女の人がかっこよく外国の人に通訳してたから、「あっ、かっこいい」と思って、YMCA通ってたの。

桑名も、養護学校では他の教科ではまにあわないと思い、英語ならと思って、英語は熱心に勉強したという。富山では養護学校の教員に面倒を見てくれる人がいたが、郡山養護学校にも学生運動経験のある教員もいて、桑名も「社会的なもの」に関心を持ち、大学進学を希望するようになったという。「桑名敦子を福島大学に入れる会」が結成され、成田闘争に関わっていた福島大学、福島県立医大学生が勉強を教えたという★06。

—— 大学は現役で入って4年で出たってことだね。ちなみに何学部何学科？

奥平 文学部仏教学科。そうそう。よく出たよねほんとに(笑)。卒論まで書いたんだよ。よく書いたよね(笑)。

—— 何書いたの？

奥平 なんかね、はっきり覚えてないけどスッタニパータっていう思想があって、仏教思想。

—— 仏教の、古代、原始仏教ですよ。

奥平 …の解脱思想についてとか書いたらしい(笑)。訳わからん。ネタだよ、話す時の。

### 3-2 2000～高島屋→2002～バークレーへ

—— 80年に大学卒業。で、高島屋？デパート勤めてた時期もあった。で、たまたまダスキンに応募を知って、出したら受かっちゃって…、と聞いてますけど。

奥平 あの、先輩が教えて…、

—— 先輩ってどういう先輩なの？

奥平 障害のある人。そこって福祉機器売ってたから。高島屋に入ってる、ガット・リハビリっていう、今もあると思うけど〔1974年、京都で開業、福祉用品等のレンタル・販売、現在は豊通オールライフ、本社東京 <https://www.toyotsu-alllife.com/company/outline/>〕。そこに就職したの。知り合いのつてで。高島屋の中に売り場を持ってた。で、今は死語ですけど、デバガをやってたわけ(笑)。

—— 見に行きたかったかもしれない。

奥平 (笑) そうだよ。

—— 就職試験受けて？

奥平 うん。それで1年目に、ダスキンのがあるって言われて。ミーハーな私はすぐに応募し、「ただでアメリカに行けるじゃん」とか思って、応募したら選ばれたから、1年ぐらい

してすぐにもうアメリカに行っちゃったの。

—— 入社した年ぐらいに…、募集があつて。

奥平 募集の後ちょっと時間があつたから、結局は82年の1月にアメリカに行った。だから、在職は1年ちょっと。

—— 80年の4月にガット・リハビリィに入って、81年、で、82年か。

奥平 1月7日だったかな、6日だったかな。

—— この間も、北山の店で聞いた時、それはけっこうやっぱり転機、転機的な…、

奥平 そりゃそうだよ。大学に入ったのも転機だよ。初めての一般社会だから。施設、だって4歳からずっと…、

—— 4歳から18までおんなじとこだつたら、そりゃあなかなかのもんだよね。

奥平 そう、そう。今思うとよくやったよね。買い物すらできなかつたと思う、最初。郵便局とか行ったことなかつたし、銀行で口座開くなんてこともしたこともなかつたし。まあ普通の高校生もそれはあんまりないか。ま、とにかく初めてだった。

そして、株式会社ダスキンって、1981年から日本の障害者を海外に派遣する、「ダスキン障害者リーダー何とか派遣事業」っていうのをやってるんですけど、そのまず第1期生として私はアメリカのバークレーに送られて。

それ、もう500人ぐらい研修を修了している。

## 4 バークレーでの経験

### 4-1 派遣先はお任せ

奥平 日本の人を派遣しようと思ったのは、そもそも、その前の年だったかな、前の前の年かな、ダスキンの創業者が突然亡くなったんですって。その創業者って鈴木清一っていう方なんですけど、何かすごいいろんなこと…、生きる上で、ちゃんとした考え、理念を持ってた方で、「人のために生きる」とか、それはダスキンの人に聞いた方がいいと思うんだけど、社会のためにいいことをするっていう信念持ってた人で。で、会社の社員の人たちも「彼になら」って、付いていったんだと思うけど。

で、亡くなって社員の人たちがしゅんとしてたから、それをこう立て直すために何かやったらいいね、っていう話が出て。それでちょうど81年が国連の国際障害者年だったでしょ。それがあって、「じゃあ障害者のこと、何かやろう」ってなったんですって。で、宮城まり子っているじゃないですか。宮城まり子さんに、何かのつてがあつたか分かんないけど相談したら、「じゃあ、障害者を海外に派遣したら？」って言われたって聞いたよ。

—— へえー。宮城まり子、関わってるんだ。ちょっと意外感ある。

奥平 私なんかはさ、ほんとに障害者のこと分からなかつたわけでしょ。だから行き先なん



か選べるわけじゃない、自分で。アメリカなんて分かんないし。1980年なんてそんな時代じゃないじゃん。まだ1ドル240円とか60円。だからリハ協が見つめてきたところに行っただけ。もちろん、ちゃんとしたしっかりした意識を持つてる人は「ここ行きたい」って言ったかもしれないけど、私みたいなパツパラパーはなんにも考えてなかったから(笑)、言われたところに行っただけがバークレーの自立生活センターだったという。よく学校とかじゃなくて障害者団体に行っただけ、とか思っちゃうけど(笑)。

—— 81年って、日本でそういうものが入ってきた、ちょうどその頃ですよ。

奥平 そう、ちょうど。エド・ロバーツ〔Edward V. Roberts〕★07が79年から80年に1回来ててらしいんだけど。その頃、私まだ京都で大学生やってたし、なんもわかんなかった。

—— いくつか、そういうアメリカのリーダーを呼んだ催が国際障害者年の前、前の年あたりであって、その報告書なんか出ってますね(→権藤〔2021〕)。だから業界では話題になった話だと思うんだ。で、たぶんリハ協の人たちもその辺に関わってたとか、関わって知ったのか、もっと前から知ってたのか分かんないけど、わりとそういう場所にいたんで、じゃあそういうところ行ったら、みたいな話になったのかもね。

#### 4-2 バークレーでの経験

—— で、82年1月から半年バークレー行って帰ってきて。

奥平 1年間お礼奉公しなくっちゃと思って、1年働いて。それで83年の7月に、またアメリカに、4人でアメリカに行ったのね。桑名敦子と…、私と、あと、国井澄枝さんという人と、アガペーに今もいるのかな、土屋健造さんって、4人でアメリカに行って。

ダスキンの研修、私は6ヶ月の研修期間で、桑名敦子は9ヶ月だったかな。で、私が帰った後に、桑名敦子は、ちょうどバークレーの自立生活センターの転換期だったのかな、マイケル・ウィンター〔Michael Winter〕★08がハワイの自立生活センターの所長をやってたのをちょうど辞めて、「バークレーにおいで」って、「所長になりなさい」って言ってきてたところに、桑名敦子もマイケルと出会って。で、敦子もいったん帰ったけど、マイケルが「おいで、おいで」って言ったからか分かんないけど、翌年83年の、何月かなあ、何月か前に、アメリカに行って。マイケル・ウィンターを恋しかったんじゃない？

—— あの人たちはその時に会った。

奥平 そうそう。ほんで、帰る直前まで付き合ってたのかなあ、よく分かんないけど。

—— 付き合っただけ、いっぺん戻って、やっぱり行くわ、って話になって？

奥平 うん。そうそう。それで私も「えーっ、じゃあ私も…」。アメリカから帰ってきたあとして、逆カルチャーショックで、すっごいなんか日本が嫌いっていうか、もうアメリカが輝いて見えてたから、ほんとに何かアメリカに帰りたくて帰りたくて。帰りたいていう心境だったから、「あっちゃんが行くんなら私も行く」とかついて、会社辞めて行ったの(笑)。

で、それから3年2、3ヶ月、アメリカに…、

—— 3年間? そんなに行ってたんですか。

奥平 もうちょっと。だから合わせるとだいたい4年ぐらいはなってる。

—— 最初ダスキン行ったのプラス、自分で勝手にっていうか…、

奥平 勝手に行ったの、アメリカ。

—— それ全然知らなかった。けっこう長くいたんだ。主に西ですか。

奥平 バークレー。ずっとバークレーで、マイケル・ウィンターが、ビザの手配とかしてくれて、エイチワンビザって言ったかな、ちゃんと取って。バークレー自立生活センターでアルバイトをしながら暮らしてた。

—— 暮らせるぐらい稼げたんですか?

奥平 貧乏だったけど、若かったし、楽しかったあ(笑)。青春ですよ。

—— それで桑名さんはそっちにずっとその後いるわけだけれども、他は戻るけど、でも、けっこう長いこといて。

奥平 で、3年いたでしょ。その間に、樋口恵子さん〔1951生、脊椎カリエス〕とルームメイトやったり、あと、安積遊歩と出会ったり、けっこうな人に出会ってる。

—— バークレーで会ったんだね。日本ではなくてバークレーに行ったのに会ったっていう感じなんだ。

奥平 そうそう。そう。だからお世話をちょっとしたって感じ。

—— そうやって日本からやってくる人たちにね。

奥平 だから、私…もっと話すとさあ、面白いよー。みんなの裏話知ってるから(笑)。

—— アメリカ側の日本人アテンダント的な、そういう?

奥平 そうそうそう。

—— 先輩みたいな。

奥平 うーん、先輩とはみんな思っていないと思うけど(笑)。樋口恵子さんとは、どれくらいかなあ、3ヶ月かなあ、ルームメイトしてたの。私が部屋を借りてるところに恵子さんがダスキンの研修生としてやって来て、アメリカ人のリサっていう人と私と樋口恵子さんで何ヶ月間か暮らしたりした。だから仲良し。

—— で、奥平さん、経験もあるし英語できるしっていうことで、お世話っていうか、

奥平 お世話したかどうかは覚えてないけど、うん。

—— ちょっとそういうこともしながら。バークレーのそういう日常業務的なものにも、アルバイトっていうか

奥平 そう。私は Job Development って言って、職業斡旋部門でアシスタントをしてたから、だから何、履歴書の書き方とかさ、インタビューの受け方とか、そういうのの手伝いしてた。

—— 3年いて、戻って来る時は、次何やろうとか、どこで働こうとか、そういうの全然なし?

奥平 全然。私、ほんとにミーハーだから、そんなね、難しいこと考えない(笑)。なんで

帰って来たかって、これも笑うよ(笑)。

その間に桑名敦子はマイケル・ウィンターと結婚したわけよ。結婚式にも、なんとか人として出たりしたから。で、そういうのってやっぱり憧れるでしょ(笑)。ほんで私もちょっと、しばらくだけボーイフレンドいて、脊損のボーイフレンドがいて、「あぁいいなあ、結婚したいな」と思っちゃったけど、彼は、なんて言うの、他に好きな人がいて…、っていうか、しばらく私と付き合ってたけどそっちに行っちゃって、それで失恋して落ち込んだ時に、親が、「もういい加減帰って来なさい」って言って(笑)。言って、ちょうどビザも切れる頃だったのよね。んで、だから「帰るか」とか思って帰って来た。

## 5. ～朝日メディコ→～日立→1996～JIL

### 5-1 帰国後の仕事

―― 富山に帰ったの？

奥平 一番最初は帰ったけど、仕事をしなきゃいけないでしょ、生活。で、リハ協〔日本リハビリテーション協会〕の副会長を頼って、「何かアルバイトないですか？」って聞いたら、肢体不自由児協会って今もあるじゃん、あそこでアルバイトさせてくれて、そこで半年ぐらい働きながら仕事を探した。企業の仕事を探して、障害者の今で言う職業…、何だっけ、ジョブフェアみたいなものにも行って、そこで西友グループの朝日メディコっていう所に契約社員で1年働いて。それもサンシャインの43階だったから「カッコいい」とか思って行って(笑)。で、それは契約社員で1年ごとの契約で。

朝日メディコって薬屋さん。西友グループとかに卸してるとこかな。そこで財務してCPなのに各店舗の売り上げ処理とかしてた所に、何か…、私、それで、ハローワークにさ、肢体不自由児協会に通ってた時にけっこう行ってたの。で、それもあったかな。知り合いだったか忘れちゃったけど、その朝日メディコで働いていた時に、日立製作所から「面接に来ませんか」って電話がかかってきて、「へえー、日立製作所の方が大きいや」(笑)とか思って。

―― そう、奥平さん、日立勤めてる人だよ、っていうのは知ってた。それが最初に奥平さん知った時ぐらい。知ってる人たちみんな貧乏人ななかで、「大企業じゃん」、みたいな。

奥平 そうそう(笑)。ただただミーハーなだけ、みたいな(笑)。88年から日立製作所で8年ぐらい働いた。

―― で、ヒューマンケア〔協会〕って86年の開始でしょ。だから、既に自立生活センターの活動みたいな東京辺りじゃ始まっているわけじゃない。それはある種、協力者というかなあ、そんな感じで関わったっていう感じかな。

奥平 それはそうだったよね。樋口恵子さんとか遊歩とか知り合いだったから。あと、ジュディ〔・ヒューマン、Judith E. Heumann、1948生、ポリオ、自伝的な著作に Heumann et

al. [2020=2021]] いたし、エド・ロバーツまだ生きてたし、パイプもあったし。そういう所で協力はしてたけど。

―― それで、そこやめて、96年にJIL(全国自立生活センター協議会)の事務局長に、ですか。給料激減したって話は聞きましたけど。

奥平 そうそう、すごい減った。「マジカー」とか(笑)。だけど、日立で働いててもやっぱりその時代、今は違うけど、障害者枠で特別な感じだったでしょう。まあ、今も障害者枠ってあるけど。ただ、周りはどんどん一般職で出世していくのに、私がいくら論文書いてもなかなか相手にもしてもらえなかったし、英検、社内でき、英検とかTOEICとかちゃんと試験があって、情報処理技術者試験とかもちゃんと受けて、やっても全然、上にいかせてもらえなかったから…、

―― 資格は取ったんだけど、っていうことだよな。

奥平 そうそうそう。論文も書いて、やったけど。

―― TOEICも点数取ったのに、みたいな。

奥平 そうそう、全然。上司にもよったみたいだけど、私がついた上司は全然相手にしてくれなくて。そうやって不満抱えてたところに、樋口恵子さんが「真砂子、いい加減に障害者のことやりなさいよ」って言ってきて。で、その8年の間にもりハ協とも関係があったし、適当に英語も喋ったから国際会議とかにもけっこう何回か連れてってもらってたのね。そういう感じで何となくつながってはいったんだけど。で、樋口恵子さんにそう言われて、「そうだなあ。」と思って。

奥平 でも、日立を辞めるのに2年かかった。安定を捨てるってことでしょ。

―― 不満はあったけど、まあ辞めなけりゃ給料、ちょっとずつ上がったりしていくわけだし。いい給料だったんでしょ？ 大企業じゃないですか。

奥平 まあ普通に…、まあ、事務職だからそんなに高くはないけど生活できるし、ネームバリューだってあるわけじゃないですか。「日立で働いてる」ったら不動産屋の態度もコロコロと変わったし(笑)。

―― いいこともありつつ、悩んでたけど、樋口さんにJILに来てって言われて、最終的に行くわけですね。JILに1996年から2001年まで？

奥平 そう。5年弱。

## 5-2 JILでの海外支援

奥平 中西さん〔中西正司、1944生、頸椎損傷〕が、1998年ぐらいに、「JILで韓国の自立生活センターを支援しよう」って言い始めて。それが私が一番初めに聞いた、日本の障害者っていうか、ILセンターが海外支援しようっていうのの初めてだった。その時は私、そんな海外支援なんて意識もなかったし、アメリカ馬鹿だったから(笑)、「何でそんな、日本の国さえうまくいってないのに海外支援なんかしなきゃいけないのよ」ってすごく思っ

た記憶があったけど。その前後だったと思うけど、韓国からキム・ドンホウっていう人をJILで招聘して、セミナーをやったんですよ。それは覚えてて。で、それはそれで終わって。

で、高橋修さん〔1948生1999没〕が亡くなったでしょ。

—— 99年ですね。

奥平 99年。で、その次に私はJILの事務局長になったけど、もう代表の入れ替わりの時期で、次の年か、次の次の年ぐらい…。高橋さんの後釜って形で、とりあえず仮で、やってたけど、樋口恵子さんが代表を降りるっていうことで、「どうしようっかなあ」と思って。高橋さんが亡くなってなかったらまた変わったかもしれないけど。日本の障害者運動も変わったと思う。で、だから、「あ、何かちょっと違うかな」と思ってたところに、「どうしようっかな」と思ってたところに、声がかかった。

「JILでこのまま働くかな、どうしようっかなあ」と思ってたところに、リハ協から「ダスキンの仕事しませんか」と言われて。

二つのことがこの短い回顧に出てくる。海外支援を言い出したのは中西正司★09だと言う。ただ、実は奥平は中西の主張に違和も感じている。「高橋さん★10が亡くなっていなかったら」はそのことも言っている。ここではこれ以上追えないので別の機会に検討する。

## 6 2001～リハビリテーション協会

### 6-1 アジアの障害者に対する研修の開始

奥平 ダスキン、何のきっかけがあったのかそこまでは知らないけど、1998年って、何だっけかな、「アジア太平洋障害者の10年」の事業の一環として何かやり始めようということになったんですって。

—— ああ。そう〔バンフレットに〕書いてありますね。

奥平 千葉さん。2代目社長。なんかで逮捕されちゃったけどさ。すごくいい人だったよ、私たちには。その人もカリスマ性があった人で。その人が多分言い始めたのかもしれないね。よく分かんない。これは愛の輪に聞いた方がいいと思うけど。で、このきっかけで今度アジア太平洋から障害者、若い障害者を呼んで育成しようっていうのを1999年に初めて始めたんですよ。

ここに来たのは、2001年かな。研修課。私が運がよかったのはダスキンの研修生だったっていうのと、あと、英語を話したっていうところじゃない？

—— そうして受け入れながらやって、何を研修に来た人たちは得ていくのかとかね。いや、それなりに上手いこといってるな、とかさ、そういうことも聞いて、実は、意外と、と言っちゃ失礼かもなんですけど、うまくいっているんだとも思うんだけど、でもどうなんだろう、どういう感じなんだろうと思うんですよ。

奥平 私自身ダスキンの研修生だったわけでしょ、アメリカで。だから、私はこの研修事業やる時に、自分がアメリカで経験したことをみんなに経験してほしいな、と思ってやったのね。うん。それが一番大きいかな。生活を楽しむことであったり、あとは自分の障害をちゃんと受け入れられるようになっていうのと、あとは権利意識とか自分の可能性を知っていうところとか、あとは仲間の大切さっていうのを知ってほしいなっていうのはあって、それを基本にやってた。

途上国に行ったら分かるけど、日本と比べたら全然違うし、多分私たちがアメリカに行ってアメリカがすごーいって思ったそのギャップよりも、今は途上国の人たちが日本に来て、帰った時に感じるギャップのほうが大きいと思うよ。

今バンコクとか随分変わってきてるけど、それでもまだまだ日本とは状況が全然違うから。さっきも言ったように私がアメリカに行って感じて帰ってきた時のギャップよりも、たぶん彼らを感じてるギャップのほうが大きいってところがあるから、なるべくそのところもちゃんと最初から言ってやってる、っていうのがあるんですよ。だから仲間として私は研修生と接するようにはしてたんよ。それともう一つは、「お母さんにはなっちゃいけない」って誰かに言われたから(笑)、お母さんにはならないようにした。年齢的にはもうずいぶんね、あれだから。

—— そうですね。年齢的にはそのぐらい離れてるんだよね。

奥平 うん。それで、国際協力っていうか、その自立生活センターたちが…、っていうか、私は、そうそう、帰ってからも、ちゃんと何か活動してほしいっていうのはもちろんあるでしょ。だから、そのために私がアメリカで、…の人と繋がっているような関係を研修生にも作ってほしいなっていうのはあったかな。

—— 日本に来て、日本の誰かとか組織とかそういうものとの関係を作って、戻っても維持するっていう。

奥平 そう。何となくでもいいから繋がって、落ち込んだ時とか何か助けが必要な時とかに相談できるような関係を作れるような人との出会いがあったらいいかなって。

奥平は、バークレーで自分が得たものを、と語る。それはその通りなのだろう。ただ、その伝え方は、日本の各地の組織において、独自であったりもするようだ。その具体的なところは別稿で紹介する。ここでは一つの挿話を紹介する。

—— この間、メイン〔ストリーム協会、兵庫県西宮市のCIL〕の人に聞いたんだけど、何だろな、やっぱり制度の違いとかはあるわけじゃないですか。それを、例えば自分の国に戻ってすぐにできるかって言ったら普通は難しいわけじゃない？ で、そういうところはどうなの？ そしたら、これはメインストリームのなノリなのかもしれないが、けっこう、たたきこむって言ってたね。根性っていうか(笑)。

奥平 あはは(笑)。

—— ほんでやっぱりやる気っていうか、「戻って、やるぞ」っていう奴らって、感化され

てっていうか、やる気になっていって、そんなにがっかり…、落差とか格差みたいなもの  
に、「どうしようもねえや」っていうネガティブな、っていうよりは、そのまんま実現する  
わけではないにしても、すぐに実現するわけではないにしても、それなりにやれると思って  
やる気になって、っていうことは実際あるんだよって、彼らは言ってたね。

奥平 私が本格的に職員としてここ働き始めて、面接にも行ったのが3期生で、その中で、  
パキスタンの、シャフィック・ウル・ラフマンっていう奴がいて、彼を支援し始めたのがメ  
インストリーム協会。

シャフィック〔Shafiq-ur-Rehman、1977生、ポリオ★11がまずメインに行って、1月だ  
かな、夜中にシャフィックから電話がかかってきて、体験室に研修生いつも泊まるんですけ  
ど、「ここにオバケが出る」とかわけわかんないこと言って(笑)。でも、他の研修生も言っ  
てたらしいんだけど。で、「帰りたい」とか言い始めて。まだ半分ぐらいしか済んでないの  
に「帰りたい」ってって、どうしても言うこと聞かないから、「じゃあ」って、迎えに行っ  
て話をして帰ってきたんだけど、そしたら後で廉田さんが何ヶ月か…、シャフィックたちが  
帰る直前に、「もう1回、奴、よこしてくれ」とかつって、1週間だったかな2週間だった  
かな、フォローみたいな研修をしてくれたのね。で、それで帰ったんだけど、でまあ、廉田  
さんはその時どんな研修をしたかっていうの、ちょっと聞いてないけど。

シャフィックが帰って、したら日本の状況とパキスタンの状況と全然違うわけじゃない  
ですか。したら落ち込んでまた電話してきて。「誰も、僕の言うことを信じてくれない」っ  
て。「そりゃあ、だからそう言っただろ!」とかって言ったんだけど(笑)。で、泣きながら  
何回か電話してきて。なんか、その頃ダスキンもお金があったから、フォローアップで呼ぼ  
うっていうことになって。

—— いっぺん帰って、泣いて電話してきて、で、もう1回来させたの?

奥平 あの、彼だけじゃなくて何人かね。まだ3期だったから、けっこう大勢呼んだかも。  
まだお金がある時期だったからね。で、フォローアップっていうことで、過去に来た人を何  
人か呼んで、フォローアップって、した。その中にシャフィックがいて。で、札幌のDPI  
世界大会だったと思うけど、シャフィックと廉田さんと私がたまたま同じテーブルで話し  
てて、シャフィックが何か落ち込んでるっていうことを話したら、廉田さんが、「ほな、俺  
たちが行って盛り上げてやるから。次の年の2月頃行ってやるから」とかつって、ポンって、  
あれいくらだったのかなあ、30万ぐらいかな、「これで活動続けろや」って言ったの。

—— ヤクザ?

奥平 そうそう(笑)、廉田さんヤクザだよ、ほんとに。

—— ヤクザ、札がいっぱい入ってる財布を渡したりするじゃん。そのノリだよな。

奥平 30万だった…。いや、あの人の場合、袋ね(笑)。首から下げて。んで、シャフィッ  
クが何かそれを真に受けて、10月に帰ってからやり始めたんだよね。

—— パキスタンで落ち込んで…、日本に戻って来て、30万持って…

奥平 うんうん。ほんとに廉田さんが「あいつのやる気を見てやるわ」って言って、そして

私もたまたま…、これって現地まで面接に行くから、たまたま面接とそのセミナーの日程と合わせることができて。で、一緒にセミナーやったりして。で、すごい盛り上がり。それが始まり。

—— その辺からこう、やってるなっていうか…、効き目あるな、みたいな。

奥平 そうそう(笑)。図に乗ったね。

—— そんな感じ、乗った、ドライブがかかってっていうか、そんな感じなのかな。

奥平 そうそう。で、次の年にまた行ったんだよな確か。廉田さんたち。パキスタン。〔続く〕

## 7. ここまででわかったこと、さらに調べるべきこと

### 7-1 考察-研修の意義

#### ① 出会いの場として(特に女性たち)

奥平は4歳から養護学校の寄宿舎に入り、大学進学までの時期を施設で過ごした。同じ時期に同じ施設に平井がおり、彼の話は聞いていたが、出会うことはなかった。しかし、一方で、養護学校のでき始めの頃は数が少なく、各都道府県の全域から障害児が集まる場でもあった。ときに複数、「社会派」の過激と周囲から呼ばれる人がいたこともある。中でも福島県郡山養護学校には、青い芝の会の運動に関わった複数の中心人物がいて、それに接した人、何かしらを知った人、じかに関わった人もいた。ダスキン1期生でバークレーで奥平と一緒にいた桑名敦子(1959生、頸椎損傷)、3期生でやはり奥平とバークレーで会いその後もいろいろと関わりのあった安積遊歩(戸籍名:純子、1956生、骨形成不全)も同じ養護学校にいて、福島のまた全国の青い芝の会に関わった白石清春(1950生、CP)、橋本広芳(1950生、CP)らを知り、安積などは活動にも関わった。★12

奥平は、日本の動き、さらに日本での米国の流行の傍にいながら、すり抜けるようにして米国によくわからないまま行ったのが最初という人だった。障害者運動に関心があったわけではなく、米国という地に惹かれ無料で行けるとチャンスをつかみ障害者運動にであった。そして一度日本に戻りながら、またアメリカに渡り、そこで研修生を受け入れる側として働いた。奥平の場合、その前の自らの生活と比べた時にバークレーに行ったことがよかったのは明らかだ。ただ、その明らかによかったことの一つは、研修を通じて日本からの人たちとそこで会ったということでもあった。

日本の障害者運動において、他の時期と比べ、1980年代後半以降に女性のリーダーが占める割合が高く、その果たしてきた役割が大きなことは知られている。米国に住んだ桑名を、また奥平をいったん別にしても、安積遊歩、樋口恵子がこの時期に米国で知り合う。ここで、わざわざ遠くでという契機だけを見ることはないだろう。福島、東京、京都にいた人たちが、バークレ



一という狭いところで、青い芝の会にしても全障連(全国障害者解放運動連絡会議)にしても、それまで男たちが仕切ってきた場所から離れて出会うことになった。そしてそのことは、その後女性が活躍する部分が大きくなっていったことにもつながっていったのである。

以後、多くは日本を場として、そして多くは女性たちが、私的な関係と社会的な活動とが地続きでの活動がなされていく。やがてその中心にいることになる人たちがバークレーにいたということだ。それはその発祥がそこにあったというだけの話ではない。私的で近い関係とともに動いていく社会運動が存在し、一定の役割を果たしていること、そのことの意義と位置を考えさせるものだ。

## ② 伝え、つなぎ、次を作る場として

奥平は、のちにアジアの障害者を受け入れる側として働くことになったが、その際重視した点は、自身のアメリカでの経験を日本で経験してもらうことだった。それは、生活を楽しんだり、自分の障害を受け入れたり、権利意識や仲間の大切さ、自分の可能性を知ることだという。そして、そこに伝授されるのは、具体的な制度や仕組みということもあるが、まずは、自分の見本がある、それを自分たちができるという感触をつかむということらしいこともわかった。奥平はまた別のところでは、当時の経験は青春だったとも答え、また自身の恋愛経験についても語った。

そうした様々な経験を奥平はアジアの障害者に経験してもらう際、面倒を見る母親としてではなく、同志として接し、同志となることを彼らに期待した。シャフィックはその一例である。質問者からの問い、すなわち制度の違いなどがあって、必ずしも日本での経験がすぐに役に立たないのではないか、という問いかけに対し、奥平はフォローアップの機会の活用、現地でのセミナー開催への協力、さらに独特な方法での資金提供を通して、障害者運動の理念を伝え、それを現地での活動に結び付けていくことができたことを語った。伊東が述べていたように、障害という紐帯は文化や制度の差のもたらす困難よりも強いということの意味していた。かつて奥平がアメリカで学んだことが日本での展開に広がったように。

## 7-2 さらに調べるべきこと

### ① 「研修」が与えた影響の範囲

奥平は日本の障害者運動ではなく、研修を通して障害者運動を知り、学び、そしてそれをつなげた人である。同じように障害者運動を研修を通して知ることになった人はいるのか。障害者運動の受け取り方に何か異なるのか。それを調べる必要がある。

このことも含め、そして廉田のように世界放浪の旅を経て(廉田[1987])といったことも含め、場所を変えること、一人でいられたり、会わない人に会うことの意味があるようだ。複数の人に調査を行いそのことを確かめる。

単純な疑問として、幾人かの人をしばらくの期間だけ呼び、受け入れることにどれほどの効果があるのか。その問いに対して、奥平は肯定的に答えた。しかし、必ずしも肯定的にとらえられない場面もあるのではないか。どのような手練手管が何をもたらすのか。さらに、冷静に確かめる必要がある。

そして、そこに行った人の多くは肯定的な影響を与えられたと思ひ話すのだが、果たしてそれだけでよかったのか。そのことも含め、日本の運動・政策にどのような影響を与えたのか、なぜ与えたことになっているのか。どのように評定できるのか。例えば長瀬修は「パークレー詣で」現象にいささか呆れ、もっと冷静になるべきだと書いたことがある(長瀬[1997])。冷静に検討する必要がある。

## ② 仕事の意義

上述のことも含め、人はどのようにして、活動・運動に入り、続け、そして何を得るのか。金を得るといったことを想像もしなかった人たちにしても多くは、今なんらかの「事業」に携わってもいる。奥平もときに複数を天秤にかけ、いくつかの仕事を渡ってきた。運動の仕事、運動の仕事でない仕事から人は何を得るのか、また何を失うのか。

日立で奥平は障害者枠で雇用されていた。新卒採用が一般的な中で、その制度があったから採用されたとも言えるはずだ。法定雇用率を満たすために、あるいはその率に近づけるために、障害者で使える人がいると都合がよくそれで奥平を見出し、ということであったかもしれない。そして採用後は、枠とは関係なく仕事ができる、ということはないではないのだが、しかし実際にはそうではない、ということも多い。奥平はそのように遇された。そこで、このままではこのままだと思った。ただ給料はよかったから、他に何もなかったら続けていたかもしれない。給料は下がったが、JILの仕事を受けることにした。それは、人が、そのなかで障害者が、どのような時に、どのような条件があった時に、仕事を選ぶのか辞めるのか、社会(貢献)的な仕事に就くのか就かないのかに関わる。

## ■註

★01 1953年5月生。脳性まひ。1976年に結成された「全国障害者解放運動連絡会議(全障連)」副代表幹事などを務める。2000年に富山市で「自立生活支援センター富山」を開設し、以来その代表を務めている。2018年に行われたインタビュー(平井[i2018])がある。

★02 青い芝の会の活動の拠点だった大阪府立大学に入学し、以来ずっと活動を担う尾上浩二(1960年生、CP)などその進学先の大学になにかあった人もいる。1978年大阪市立大学に入学。1988年に「大阪青い芝の会」事務局長、2004年に「DPI日本会議」事務局長、他。2020年に行われたインタビューの記録として尾上[i2020a][i2020b]。奥平が入学した大谷大学にはとくになかったようだ。そこで日本での運動と(米国、というより)パークレーとの差異を、前

もって経験した人とそうでない人(数的には圧倒的に後者の方が多いはずだ)とがまず分かれる。そこにどんな差異があったのか、またなかったのか、それが検証の対象になるが別稿(権藤 [2022])で描く。

★03 1954年生。脳性まひ。1977年に「富山県青い芝の会」に入会。2003年に設立されたNPO法人「文福」の代表を務める。

★04 八木のブログでは以下。「10歳から15歳までこれまでの人生で一番暗く、友達も年に何回しか来ない在宅生活を経験。／15歳から23歳まで […]「私が大きくなったため親が介護や世話ができなくなったので」役所の斡旋で婦中町の国立富山病院に入所。／1977年の23歳の時に病院を訪ねて来た友達の影響で、入所先から出て、富山市内でアパートを借りて一人暮らしを始める。／1977年10月、日本脳性マヒ者協会「富山青い芝の会」に入会(八木 [2009])。この「病院を訪ねて来た友達」が平井。

★05 「その人〔鈴木〕はものすごい頑張り屋で手先の器用な人だから人が三年かかるのを、半年で編物の師範の免状とってものすごく頑張ってたの。ところがその人の養護学校の同級生が青い芝のCPの人で、生活保護とか年金とかで自分達も地域で生きていくんだってやっっているのが聞こえてきて。その人は、「許せない!」、そう思ったんだって。生活保護とか年金でただ食いついて、文句言おうと思って事務所に行って二晩激論したんだって。最後に、青い芝の方が「正しい!」って、結論を出すと早い人だから(安積 [1990→2012:28-29])

★06 1959年生。出生時の事故で脊髄損傷。インタビューの記録に桑名 [i2018a] [i2018b] [i2019]。別稿(権藤 [2022])で紹介する。

★07 1939年生、1995年没。ポリオ。「バークレーCIL」初代所長。

★08 2013年没。先天性の骨の障害。「ハワイCIL」「バークレーCIL」所長、「全米自立生活協議会」会長、運輸省特別補佐等を務めた。1984年に結婚した桑名へのインタビュー(桑名 [i2019])でもその活動について語られている。

★09 上智大学の学生の時の事故で頸椎損傷。1986年「ヒューマンケア協会」の設立時に事務局長、その後代表、「DPI日本会議」議長、「全国自立生活センター協議会(JIL)」代表、等を務める。著書に中西 [2014]。

★10 1948年7月生、1999年2月没。1991年に「自立生活センター・立川」を設立、代表に。「DPI日本会議」、「全国自立生活センター協議会(JIL)」等でも活動。立岩 [2019a]に新たに加えた第9章に「高橋修 一九四八～一九九九」(立岩 [2019b])。

★11 シャフィック・ウル・ラフマン Shafiq-ur-REHMAN(1977生)国籍はパキスタン。アジア太平洋障害者リーダー育成事業3期生(2001年)。障害は、肢体不自由(ポリオ)。

★12 これら福島の人たちのことについて青木他 [2019]に詳細がある。

## ■文献

青木 千帆子・瀬山 紀子・立岩 真也・田中 恵美子・土屋 葉 2019 『往き還り繋ぐ——障害

- 者運動於&発福島の50年』, 生活書院
- 安積 純子 1990 「<私>へ——三〇年について」, 安積・岡原・尾中・立岩[1990:19-56→2012]
- 安積 純子・尾中 文哉・岡原 正幸・立岩 真也 1990 『生の技法——家と施設を出て暮らす障害者の社会学』, 藤原書店
- 2012 『生の技法——家と施設を出て暮らす障害者の社会学 第3版』, 生活書院
- 権藤 真由美 2021 「(未定)」(投稿中)
- 2022 「(未定)」(投稿中)
- 平井 誠一 i2018 インタビュー 2018/01/29 聞き手:立岩真也 於:富山市・自立生活支援センター富山
- Heumann, Judith; Joiner, Kristen 2020 Being Heumann, Beacon Press=2021 曾田 夏記 訳 『わたしが人間であるために——障害者の公民権運動を闘った「私たち」の物語』, 現代書館
- 伊東 香純 2021 『精神障害者のグローバルな草の根運動——連帯の中の多様性』, 生活書院
- 廉田 俊二 1987 『どこでも行くぞ、車イス! <寝袋ひとつでヨーロッパの旅>』, ポプラ社
- 桑名 敦子 i2018a インタビュー 2018/10/09 聞き手:田中恵美子 於:東京
- i2018b インタビュー 2018/12/02 聞き手:田中恵美子 於:東京
- i2019 インタビュー 2019/11/12 聞き手:立岩真也 於:京都
- 長瀬 修 19970625 「カリフォルニアの光と闇——世界から・第五回」, 『季刊福祉労働』75
- 中西 正司 2014 『自立生活運動史——社会変革の戦略と戦術』, 現代書館
- 奥平 真砂子 i2018a インタビュー——半生のこと 2018/06/30 聞き手:立岩真也・権藤真由美 於:東京・戸山サンライズ
- i2018b インタビュー——研修の仕事 2018/06/30 聞き手:立岩真也・権藤真由美 於:東京・戸山サンライズ
- 尾上 浩二 i2020a インタビュー 2020/08/07 聞き手:立岩真也 +伊東香純 於:(NPO) ちゅうぶ
- i2020b インタビュー 2020/08/07 聞き手:立岩真也・岸田典子 +伊東香純 於:(NPO) ちゅうぶ
- 立岩 真也 2018 『病者障害者の戦後——生政治史点描』, 青土社
- 2019a 『弱くある自由へ——自己決定・介護・生死の技術 増補新版』, 青土社
- 2019b 「高橋修 一九四八~一九九九」, 立岩 [2019]
- 八木 勝自 2009 「勝自君の経歴(2009年現在)」, 『ブログ、八木勝自』  
<https://ameblo.jp/yagi-katuji/entry-10236924280.html>

Go to Berkeley and Accept from Asia  
From an interview with Masako Okuhira

Mayumi Gondo

Keyword:

Disability、Difference、Berkeley、Independent Living Movement、Training